

令和7年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第1号（5月予報）

令和7年4月23日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は5月を主とします。次回の発表は令和7年5月27日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇病虫害発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトで読者登録できます。<https://www.e-komachi.jp/>

◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	いもち病（苗いもち、苗の葉いもちを含む）の発生量は平年並と予想されますが、育苗施設の周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かないようにし、育苗期のいもち病防除を必ず実施してください。
小 麦	赤かび病の感染時期は平年並と予想されますが、小麦の生育が進んでいるほ場では、開花始期の防除が遅れないように注意してください。
大 豆 野 菜	大豆とえだまめのネキリムシ類の発生時期は早いと予想されます。例年被害が見られるほ場では、薬剤を塗抹処理した種子を播種するなどの防除対策を実施してください。
花 き	りんどうのリンドウホソハマキの発生時期はやや早いと予想されます。ほ場を観察して、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、直ちに防除を実施してください。
果 樹	りんご、なしでは、果樹カメムシ類（クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ）の発生量がやや多いと予想されます。園内への飛来状況をよく観察し、飛来数が多い場合は防除を実施してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病 (苗いもち、苗の葉いもちを含む)	全県	—	—	平年並
	苗立枯病 (ピシウム菌)	全県	—	—	平年並
	(リゾープス菌)	全県	—	—	やや少ない
	イネミズゾウムシ	全県	早い	—	やや多い
	イネドロオイムシ	全県	早い	—	平年並
	イネミギワバエ(第1世代) (イネヒメハモグリバエ)	全県	早い	—	多い
	フタオビコヤガ(第1世代) (イネアオムシ)	全県	早い	—	少ない
小 麦	イネキモグリバエ (イネカラバエ)	全県	—	—	やや少ない
	赤かび病	全県	平年並	—	平年並
大 豆	うどんこ病	全県	—	—	平年並
	ネキリムシ類	全県	早い	—	やや少ない
えだまめ	ネキリムシ類	全県	早い	—	やや少ない
りんどう	リンドウホソハマキ (第1世代)	全県	やや早い	—	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	少ない	少ない
	モニリア病 (花(実)ぐされ)	全県	平年並	—	やや少ない
	黒星病	全県	平年並	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	平年並	やや少ない
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキ、リンゴモンハマキ)	全県	—	—	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ)	全県	早い	—	やや多い
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	平年並	—	やや少ない
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	平年並	少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	早い	—	やや多い
	ニセナシサビダニ	県北部・県中央部	早い	—	—
ぶどう	黒とう病	県南部	—	—	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 いもち病（苗いもち、 苗の葉いもちを含む）	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている（ / + ）。

イ 前年の穂いもちの発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ / - ）。

（２）防除上注意すべき事項

○ 苗の葉いもち

ア 育苗施設の周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かない。

イ 育苗期間に１個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設の苗は移植しない。

ウ 育苗期のいもち病防除は、次のいずれかの方法で必ず実施する。

① 播種時～播種14日後にベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL、又は播種時～播種7日後頃に1,000倍液を箱当たり1Lかん注する。ただし、種子消毒にタフブロック又はエコホープDJを使用した場合は、本剤の播種時処理は行わない。

② 緑化始期に、ビームゾル500倍液を箱当たり500mLかん注する。

○ 本田の葉いもち

ア 育苗期間～移植当日に施用する本田の葉いもちを対象とした防除薬剤には、育苗箱施用剤、側条施用剤があり、防除効果の持続期間は7月中旬頃までである。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、次のいずれかの方法で防除する。薬剤によって使用時期が異なるので注意する。

① アプライ箱粒剤、デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤、ブーンパディート箱粒剤、ブーンレパード箱粒剤、ブイゲット箱粒剤のいずれかを箱当たり50g散布する。

② ファーストオリゼ箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤、ルーチン粒剤のいずれかを箱当たり25～50g散布する。箱当たり散布量が25gとして使用可能なのは、10a当たりの使用箱数が20箱以上の場合である。

③ ルーチンフロアブル100倍液を箱当たり500mLかん注する。

④ ミネクトブラスター顆粒水和剤200倍液を箱当たり500mLかん注する。

⑤ 高密度播種苗は箱当たりに乾籾として200～300g程度播種する場合とし、薬剤の処理時期は移植3日前～移植当日とする。その場合の薬剤使用量は1kg/10aまでとなるよう、10a当たりの使用箱数に応じて箱当たりの薬量を50～100gの範囲で調節する。なお、高密度に播種する場合に使用できる薬剤は限られているので事前に確認する。

⑥ ミネクトフォルスターSCを高密度播種苗で使用する場合は、本剤の使用量が100mL/10aとなるよう、10a当たりの使用箱数に応じて、箱当たり500mLで希釈倍数50～100倍の範囲で調節する。

⑦ ミネクトブラスター顆粒水和剤を高密度播種苗で使用する場合は、本剤の使用量が50g/10aまでとなるよう、10a当たりの使用箱数に応じて、箱当たり500mLで希釈倍数100～200倍の範囲で調節する。

ウ 側条施用剤を使用する場合は、次のいずれかの方法で防除する。

- ① ペースト肥料ではオリゼメート顆粒水和剤、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、側条オリゼメートリディア顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤で行う。
- ② 粒状肥料ではコープガード剤で行う。
- ③ 移植同時施薬機を用いる場合は、オリゼメート粒剤20、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤／ルーチンパンチ箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤、箱大臣粒剤、ブーンパディート箱粒剤、D r．オリゼパディート粒剤、D r．オリゼフェルテラ粒剤、D r．オリゼリディア箱粒剤のいずれかで行う。ただし、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤／ルーチンパンチ箱粒剤及び箱大臣粒剤は側条施用を推奨しない移植同時施薬機があることから使用前に確認する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並 (前年よりやや多い)
(リゾープス菌)	—	やや少ない (前年並)
	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている (/±) (ピシウム菌 /ー、リゾープス菌 /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗期間中、低温時はできるだけ温度を確保し、土壤の湿度を適切に保つ (ピシウム菌)。
- イ 出芽期間中は32℃以上の高温にしない。また、育苗期間中は高温に注意し、適切な温度管理を行う (リゾープス菌)。
- ウ 床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤、ナエファイン粉剤を使用しなかった場合は、播種時にオラクル顆粒水和剤 (ピシウム菌) 、タチガレエースM液剤、ナエファインフロアブル、ランマンフロアブル (ピシウム菌) を使用する。
- エ ウの対策をしなかった場合は、出芽後、発病前にタチガレエースM液剤をかん注するか、出芽後～緑化始期にランマンフロアブル (ピシウム菌) をかん注する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 イネミズゾウムシ	早い (前年並)	平年並 (ー)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (ー/)。
- イ 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 前年6月の食害株率が90%以上に達していたほ場では、次のいずれかの方法で防除を行う。
- ① パディート箱粒剤、ファーストオリゼリディア粒剤、フェルテラ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08、ダントツ箱粒剤などを育苗箱に施用する。なお、高密度に播種し、移植3日前～移植当日処理する場合は、パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08、ダントツ箱粒剤などの使用量が1kg/10aまでとなるように10a当たりの育苗箱数に応じて、育苗箱1箱当たりの薬量を50～100gの範囲で調節する。
 - ② ダントツ水溶剤、ミネクトフォルスターSC、ミネクトブラスター顆粒水和剤などを育苗箱にかん注する。なお、高密度に播種する場合は、ダントツ水溶剤又はミネクトブラスター顆粒

水和剤では使用量が50 g/10 a、ミネクトフォルスターSCでは100mL/10 a までとなるように10 a 当たりの育苗箱数に応じて、育苗箱1箱当たりの薬量を調節する。

- ③ コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、側条オリゼメートリディア顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤を移植時に側条施用する。また、移植同時施薬機を用いる場合は、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤／ルーチンパンチ箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤、箱大臣粒剤、ブーンパディート箱粒剤、Dr. オリゼパディート粒剤、Dr. オリゼフェルテラ粒剤、Dr. オリゼリディア箱粒剤のいずれかで行う。ただし、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤／ルーチンパンチ箱粒剤及び箱大臣粒剤は側条施用を推奨しない移植同時施薬機があることから使用前に確認する。

イ RACコード1A、1B、2Bに対して感受性が低下しているイネドロオイムシが確認されている地域では薬剤の選択に注意する。

ウ 移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、6月上旬に防除の要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 イネドロオイムシ	早い（－）	多い（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/－）。

イ 前年の発生量から、越冬量は多いと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア イネミズゾウムシを対象として移植前～移植時に殺虫剤を施用したほ場では、本種の防除の必要はない。

イ RACコード1A、1B、2Bに対して感受性が低下している地域では薬剤の選択に注意する。

ウ 移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、産卵盛期（6月上～中旬）に防除要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 イネミギワバエ（第1世代） （イネヒメハモグリバエ）	早い（－）	少ない（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/－）。

イ 前年の第2世代の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 極端な早植えや遅植えを避ける。また、移植時の深植えや移植後の深水を避ける。

イ 前年多発したほ場では、パディート剤、ヨーバル剤、フェルテラ剤、グランドオンコル剤、スピノ剤、アレス剤、プリンス剤、リディア剤のいずれかを育苗箱に施用する。又は、ガードナーフロアブルを育苗箱にかん注する。

ウ イの育苗箱施用剤や育苗箱かん注剤を使用しなかった場合は、移植後に産卵状況を確認する。株当たり1.5個以上又は産卵株率50%以上の場合には、被害初期にエルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン粉剤DL、トレボン粒剤のいずれかを散布する。

エ 本種の被害は突発的に発生するため、今後の予察情報などに注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 フタオビコヤガ（第1世代） （イネアオムシ）	早い（－）	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ 前年の第3世代の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（－/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 前年多発したほ場では、フェルテラ剤（D r．オリゼフェルテラ粒剤、ファーストオリゼフェルテラ粒剤など）、スピノ剤（プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤など）のいずれかを育苗箱に施用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量（越 冬 量）
7 イネキモグリバエ （イネカラバエ）	－	やや少ない（－）

（１）予報の根拠

ア 前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（－/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 前年多発したほ場では、以下の防除対策を行う。

① イネ科雑草の茎の中で越冬するため、6月上旬までに畦畔の除草を行う。

② グランドオンコル粒剤（RACコード：1A）又はブイゲットグランドオンコル粒剤（同：P3・1A）を移植当日に育苗箱施用するか、リディア箱粒剤（同：4F）又はD r．オリゼリディア箱粒剤（同：P2・4F）を移植3日前～当日に育苗箱施用する。ただし、RACコードが1Aの薬剤に対して感受性が低下しているイネドロオイムシが確認されている地域でグランドオンコル剤を使用する場合は、イネドロオイムシに対して別途防除を行う。

B 小麦

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 赤かび病	平年並（－）	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ 秋田地域振興局管内の定点調査（品種：銀河のちから）によると、4月14日現在の葉齢は11.6葉（平年10.4葉）、幼穂長は8.8mm（平年11.9mm）だった（+/-）。

ウ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（－/±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多肥栽培を避ける。

イ 1回目の防除は開花始期にシルバキュアフロアブル（RACコード：3）又はストロビーフロアブル（同：11）を散布し、2回目は1回目の防除から7～10日後にイオウフロアブル（同：M2）、石灰硫黄合剤（同：M2）、トップジンM水和剤（同：1）、トップジンM粉剤DL（同：

1) のいずれかを散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤を連用しない。

エ 開花始期に1回目の薬剤散布ができないと予想される場合は早めに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 うどんこ病	－	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 前年乳熟期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本病は厚播、多肥、過繁茂のほ場で発生しやすいため、適切な肥培管理に努める。

イ イオウフロアブル（RACコード：M2）、カッシーニフロアブル（同：50）、ストロビーフロアブル（同：11）、石灰硫黄合剤（同：M2）、トップジンM水和剤（同：1）のいずれかを発生初期から2～3回散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤を連用しない。

C 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ネキリムシ類	早い（－）	やや少ない（－）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（カブラヤガ（－/ ））。

イ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおけるカブラヤガ成虫の初確認時期は、4月2半旬（平年4月3半旬）で早かった（－/ ）。

ウ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月4半旬までのタマナヤガの総誘殺数は9頭（平年19.5頭）、カブラヤガの総誘殺数は1頭（平年28.7頭）でいずれもやや少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、播種前には場内やは場周辺の除草を行う。

イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

① クルーザーFS30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

D えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ネキリムシ類	早い (－)	やや少ない (－)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(カブラヤガ(－/))。
- イ 秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおけるカブラヤガ成虫の初確認時期は、4月2半旬(平年4月3半旬)で早かった(－/)。
- ウ 秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおける4月4半旬までのタマナヤガの総誘殺数は9頭(平年19.5頭)、カブラヤガの総誘殺数は1頭(平年28.7頭)でいずれもやや少なかった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。
- イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。
- ① クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
 - ② 播種時にカルロス粉剤又はカルロス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
 - ③ 播種時～本葉2葉期にカルロス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。
- ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

E りんどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 リンドウホソハマキ (第1世代)	やや早い (－)	やや少ない(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。
- イ 有効積算温度計算シミュレーション(J P P－NET、気象観測地点：秋田)による越冬後成虫の羽化始期は5月30日(平年6月1日)と予測される(±/)。
- ウ 前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。
- イ 薬剤の散布適期は5月下旬～6月上旬であるが、ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、直ちにアディオンプロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤などの薬剤で防除する。

F りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 腐らん病	－	少ない（－）

（１）予報の根拠

ア ４月２～３半旬の巡回調査における発病樹率は0.3%（平年3.5%）、発病地点率は5.0%（平年27.3%）でいずれも低かった（－／－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 樹体検診を実施し、早期発見と適切な処置に努める。

イ 胴腐らんは病斑部を削り、草つき土で覆い、ビニールなどを巻く（泥巻き）。前年に処置した部分は土を取り除いて治癒状況を調べ、必要によっては再度処置を行う。胴腐らんの横径が枝幹部の2/3以上に拡大している場合は、治癒が困難なため、速やかに切除・伐採し処分する。

ウ 枝腐らんの剪去跡や、胴腐らんの削り取り跡（健全部を含め紡すい状に大きく削る）にトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。

エ 剪去した枝腐らん、削り屑は園内に放置せず、焼却する。

オ トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らんの削り取り跡のみに使用し、剪定の切り口には使用しない（薬害防止）。

カ 本病の防除は年間を通じて行い、病原菌密度の低下に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 モニリア病 (花(実)ぐされ)	平年並（－）	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－／±）。

イ ４月21日時点のふじの開花予測日は、かつの果樹センター（鹿角市）が５月10日（平年差＋4日）、果樹試験場（横手市）が５月5日（平年差＋3日）となっている（＋／）。。

ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（－／－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 花(実)ぐされは見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。ひこばえは剪去する。

イ 葉ぐされの発生状況に応じて、次により防除を行う。

① 開花直前に葉ぐされの発生が見られた場合は、保護殺菌剤（チオノックフロアブル、デランフロアブル、ジマンダイセン水和剤など）にアンビルフロアブル1,000倍液、インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル、サンリット水和剤のいずれかを加用し散布する。

② 多発園及びその周辺では実ぐされ防止のため、中心花満開期にトップジンM水和剤を散布する。株ぐされ防止のため、落花直後に保護殺菌剤にアンビルフロアブル1,000倍液を加用し散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 黒星病	平年並（－）	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ ４月21日時点のふじの開花予測日は、かつの果樹センター（鹿角市）が５月10日（平年差＋４日）、果樹試験場（横手市）が５月５日（平年差＋３日）となっている（＋/－）。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 前年の発生状況に応じて、次により防除を行う。
- ① 前年に黒星病の発生がなかった園地では開花直前にオンリーワンフロアブル（ＲＡＣコード：３）など、落花直後にアンビルフロアブル（同：３）などを、保護殺菌剤（チオノックフロアブル、デランフロアブル、ジマンダイセン水和剤など）に加用して散布する。
 - ② 前年に黒星病の発生があった園地では開花直前にカナメフロアブル（ＲＡＣコード：７）などを、落花直後にユニックス顆粒水和剤47（同：９）又はミギワ20フロアブル（同：52）を保護殺菌剤に加用し散布する。
- イ 耐性菌出現回避のためＲＡＣコードが３、７、９、52の薬剤の使用はそれぞれ２回以内とする。
- ウ 落花10日後以降の薬剤散布の間隔は10日程度を基本とし、間隔が長くないように注意する。
- エ 苗木には、定植後に展葉を確認したら保護殺菌剤を７～10日間隔で２～３回散布する。その後、定期的に保護殺菌剤を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	－	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

- ア ３月１～２半旬の巡回調査におけるリンゴハダニ越冬卵の発生短果枝率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。
- イ 前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の２回行い、発生密度の低下に努める（ナミハダニ）。
- イ 発生が多い場合は、落花直後にバロックフロアブルなどを散布する（リンゴハダニ）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 ミダレカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 開花直前又は落花直後に IGR 剤、BT 剤、サムコルフロアブル10、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。特にミダレカクモンハマキが多く、開花期間中に被害（巻葉）が目立つ園地では落花直後の散布を必ず実施し、散布時期が遅れないように注意する。
- イ 訪花昆虫を保護するため、開花 1 週間前から落花直後の訪花昆虫活動期やミツバチ巣箱設置期間は、訪花昆虫に影響のある殺虫剤（上記ア以外の殺虫剤）を散布しない。
- ウ マッチ乳剤は、サビ果発生のおそれがあるので、落花10日後から6月下旬までは散布しない。
- エ 交信かく乱剤は、リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキ及びミダレカクモンハマキの成虫発生前の5月末までに、ハマキコンーNは150本/10a、コンフューザーRは100本/10aを、手の届く範囲に80%、樹上部に20%の割合で取り付ける。使用する面積は広くまとまるほど効果的で（最低20a）、風通しの良い狭い園地や急傾斜地では効果が劣る。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	早い (一)	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう 1 か月の気温は高いと予報されている (－/＋)。
- イ 越冬量調査におけるクサギカメムシの越冬数は平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
- イ 飛来数が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。
- ウ 殺虫剤の散布はミツバチの巣箱撤去後とする。

G なし (日本なし)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	早い (前年より早い)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう 1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 潟上市予察ほにおける子のう胞子の初飛散は、4月11日 (平年 4月20日) で早かった (－/)。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 芽基部病斑を切除し、園外へ搬出し処分する。腋花芽利用率が高い園地では、芽基部病斑が多い傾向があるため注意する。
- イ DMI 剤を散布する際は、散布間隔は10日以上空けない。
- ウ 前年に黒星病の発生した園地でスコア顆粒水和剤を使用する場合は、2,000倍で使用する。

エ 耐性菌の出現を回避するため、DMI剤（RACコード：3）、QoI剤（同：11）、SDHI剤（同：7）、DHODHI剤（同：52）の使用はそれぞれ2回以内とする。また、これらの系統の薬剤とユニックス顆粒水和剤47（同：9）は、必ず保護殺菌剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ベルコート水和剤など）に加用して使用する。

オ スクレアフロアブルは花粉の発芽率を低下させる事例が報告されているため、受粉作業が終了した翌日以降に使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	平年並（前年よりやや遅い）	やや少ない （前年より少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 果樹試験場（潟上市）における南水の展葉日は4月22日（平年差±0日）だった（±/ ）。

ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除する。

イ 落花直後から7～10日ごとにオキシラン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、デランフロアブル、ベルコート水和剤、ナリアWDG、ユニックス顆粒水和剤47のいずれかを散布する。

ウ ユニックス顆粒水和剤47は単用せず、主剤に加用して散布する。

エ 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ハダニ類 （ナミハダニ、リンゴハダニ）	－	少ない （前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 3月1～2半月の巡回調査におけるリンゴハダニ越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

イ 前年の発生量から、越冬量は少ないと推定される（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 不要な徒長枝は剪去し、焼却する（ナミハダニ）。

イ 発生が多い場合は、落花直後にバロックフロアブルなどを散布する（リンゴハダニ）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ）	早い（－）	やや多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/+）。

イ 越冬量調査におけるクサギカメムシの越冬数は平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ 飛来数が多い場合は、落花以降にエルサン水和剤40又はスミチオン水和剤40を散布する。ただし、スミチオン水和剤40は展葉直後の柔らかい葉で薬害のおそれがあるので、生育が遅れている場合は落花直後及び5月中旬に散布しない（黄変落葉）。

ウ 殺虫剤の散布はミツバチの巣箱撤去後とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ニセナシサビダニ	早い（－）	－

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 前年発生が確認された園地では、発芽2週間後～新梢伸長初期にコテツフロアブルを散布する。ただし、コテツフロアブルはミツバチなどへ影響があるため、訪花昆虫を利用する園地では使用しない。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
赤星病	－	－	平年並	黒星病との同時防除に努める。

H ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒とう病	－	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは特に感染しやすいので注意する。

イ 伝染源となる前年の被害枝（結果母枝）や巻きひげは、切り取って処分する。

ウ 新梢伸長期にオーソサイド水和剤80、新梢長15～20cm頃にデランフロアブルを散布する。ただし、デランフロアブルは展葉数2～3枚時に散布すると薬害（葉の褐変）を生じるおそれがあるので注意する。

エ 発生が多い園地では、新梢伸長期にウで使用する薬剤にDMI剤（RACコード：3）のインダーフロアブル又はマネーじDFを加用して散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、DMI剤の使用は2回以内とし、連用は避ける。

IV. 気象予報

令和7年4月17日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（4月19日～5月18日）

（1）予報のポイント

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、特に期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

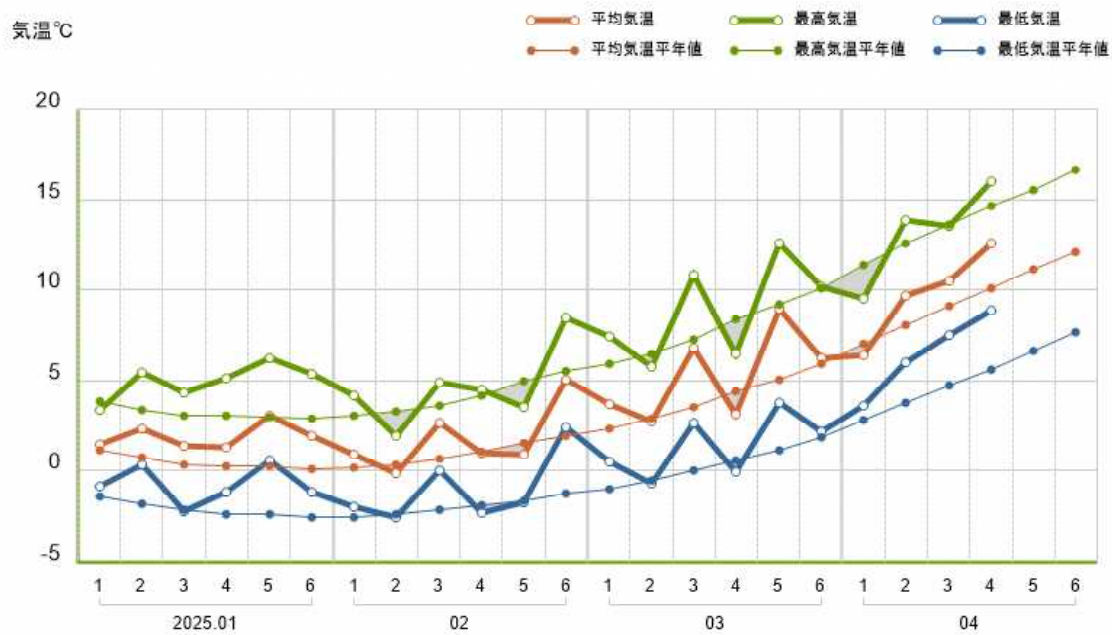
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	40%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

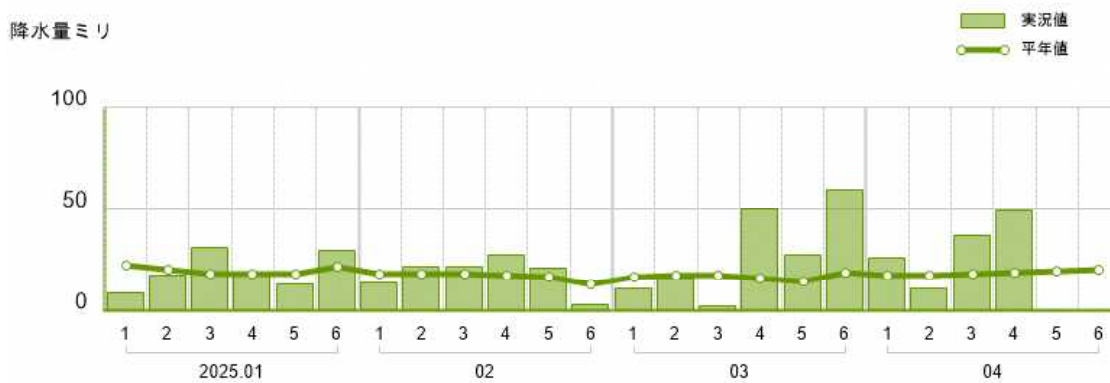
	低い	平年並	高い
4/19～4/25（1週目）	10%	10%	80%
4/26～5/2（2週目）	20%	40%	40%
5/3～5/16（3～4週目）	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～4月4半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬をハウス内土壌に浸透させないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で使用してください。

詳細は、令和7年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○ 安全使用の基本事項

- ・ 農薬の使用基準を遵守する。
- ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・ 防除履歴を必ず記録する。

○ 農薬使用上の注意

- ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
- ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
- ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

○ 農薬取扱い上の注意

- ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移しかえて保管しない。また、食品と一緒に保管しない。

問合せ先

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251